

INTERNATIONAL SOCIAL SERVICE JAPAN

INTERCOUNTRY

インターカントリー



新年のご挨拶

常務理事 大森 邦子

新年明けましておめでとうございます

本年も皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げますとともに、旧年中皆様からISSJに頂きました暖かい励ましとご支援に心より厚く御礼申し上げます。

昨年、日本の政府機関は、1980年ハーグ条約「子どもの奪取に関するハーグ条約」の批准に向けて検討を始めました。国際結婚の破綻に伴う子どもの親権の問題は、関係する国の法律が異なることから起きる問題を解決するために、共通の認識を持つことが必要とされています。日本は離婚すると父か母のどちらかが親権を持つという単独親権ですが、先進国では親の離婚と親子関係は別のものであるという考えから、父母ともに親権を持つ共同親権が定められています。今後法整備に向けての政府の取り組みが期待されます。

また、今年も実親の保護が受けられない子どもたちの最終保護手段である国際養子縁組に関する1993年ハーグ条約「国際養子縁組に関する子の保護及び国際協力に関する条約」の批准を日本政府に訴えてまいります。

現場は待ったなしで相談がまいりますので、日々研鑽をつみながら、国際養子縁組援助、親子の再会援助、在日の難民および難民申請者支援、無国籍児の支援や国際福祉に携わる人材育成に力を入れてまいります。

今年も多くの皆様のお力を頂いて、役職員一同心を合わせて活動してまいります。活動資金が不足しております。皆様からのご支援、ご寄附（寄付控除の対象となります）、またチャリティ映画会やコンサートへのご協力を賜りますようお願い申し上げます。



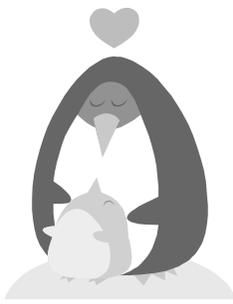
養子縁組をした家族から
寄せられたクリスマスカード



子どもの権利を守る国際福祉サービス

ISSJは、二カ国以上にわたる福祉・人権問題に関する相談事業を行っています。国際養子縁組、外国籍児の本国送還・移住、無国籍状態におかれた未成年者の国籍取得など、ISSJに寄せられる問題は、多岐にわたります。

国際養子縁組は成立後のフォローアップの支援が欠かせません。幼少期にISSJを介して養子縁組された養子が成人し、自分のルーツ捜しの相談を寄せることも多くあります。過去の記録を全て保管しているISSJは、ルーツ捜しの一環として、実親捜しを支援しています。その際には、実親の現在の生活を守る配慮も欠かせません。また、連れ去られた子どもや行方不明となった親の居所を捜し出すには、各国のISSJ支部や行政機関との連携・協力が不可欠です。ISSJのソーシャルワーカーは、日本国内にとどまらず、各国の関係機関と調整をしながら、その子どもと家族に対し、何ができるかを考えます。国際結婚・離婚を巡る子どもの親権や面会交流のとらえ方は、それぞれの立場、各国の法律によって大きく異なります。そのため、お互いに納得のいく着地点を見いだすことは困難ですが、ISSJは未成年者の福祉と権利を最優先にかかげ、最善の解決策を見いだす努力を続けています。



ケース 1

アキちゃんは17年前に、フィリピン人母と日本人父との間に生まれました。当時フィリピン人母はビザのない不法滞在者でした。婚姻をしていない父母は、アキちゃんの出生届を市役所に提出すると母の不法滞在が明るみに出て、母子共にフィリピンに送還されるのではないかと考え、出生届を提出しませんでした。その結果、アキちゃんは乳幼児の定期健診・予防接種はもとより、小学校、中学校の義務教育すら受けることなく、成長しました。両親とアキちゃんは十数年にわたり家族として暮らしていました。しかし、5年前に、母が車との接触事故を起こしたため不法滞在が発覚し、母はフィリピンに送還をされていました。

昨年、児童相談所の助言を受けて、アキちゃんは日本人父と共にフィリピン大使館に出生登録について相談をしました。そこでフィリピン大使館は、アキちゃんと母に関する調査を尽くすようにと本件をISSJに照会しました。ISSJは、フィリピン大使館に母親が送還された日の特定とフィリピン大使館が発行した渡航証の記録開示を求めました。また、アキちゃんと父親に面接を行い、父子の生育歴・生活歴を聴取しました。ISSJは、父子との面接記録とフィリピン大使館から入手した母に関する記録を基に調査報告書を作成し、年明けにはフィリピン大使館で彼女の出生登録手続きを受け付けてもらえるよう、調整をしています。また、ISSJは、出生証明書、外国人登録証、パスポートなど身分を証する書類を何も持たないアキをNPO法人のフリースクールに受け入れてもらえるように相談をもちかけました。現在、アキちゃんはフリースクールのスタッフの温かい支援を受け、意欲的に学習に取り組んでいます。ISSJは、フィリピン国籍が取得できたら、日本人父による任意認知と就籍（日本国籍取得）を目指したいと考えています。（名前は仮名です）【財団法人 日本財団助成事業】

ケース 2

トシ君はヨーロッパ人父と日本人母との間に生まれました。生まれてすぐ、両親が離婚したためトシ君は父の国から、母と一緒に日本に移りました。不幸なことに、トシ君が4歳の時、母親が交通事故で亡くなりました。親族には誰も世話できる人がいなかった為、トシ君はそれ以後ずっと、C市の児童養護施設で育ちました。今年4月、10歳になったトシ君を探しに父親が来日しました。父親はこれまで何度も来日していましたが、日本語ができないこともあり、トシ君がどこにいるのかが手がかりがつかめないうえに、C市の児童相談所も父親が離婚後に共同親権を持っていたことを知り、父親の行方を捜していました。ISSJの助けもあり、およそ10年ぶりに再会した二人。父親の強い意向で、トシ君は出生の地、父の国に帰ることになりました。

ISSJはトシ君が暮らす養護施設の職員、児童相談所の担当者、また父親と連携し、パスポート取得や親子の関係作りを行ってきました。特に注意していたのはトシ君の新生活への適応です。国際電話やメールで父親、トシ君、へのカウンセリングを通じて支援をしてきました。トシ君は初めはその国の言葉が分からず「帰りたい」と言っていたのですが、今ではすっかり現地の学校にも慣れ、父との二人暮らしを楽しんでいます。ISSJではこれからもこの親子を見守ると共に、国境を越えて生き別れになっている親子の再会に力を尽くしたいと思います。（名前は仮名です）【財団法人 日本財団助成事業】



難民に関わるジュネーブ国際会議報告

6月28日より3日間、NGOコンサルテーションという国際会議に参加しました。これは、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）とパートナー契約を結ぶNGOが一同に会し、難民問題の様々な側面についてUNHCRと直接対話するものです。参加者は70か国212団体、403人に上りました。全体で10のテーマについて討議し、地域別セッションではヨーロッパ、アジア、中東、アフリカ、北米の5つの地域に分かれて話し合いました。日本からは弁護士2人、難民1人を含む計7人の参加です。

会議では難民の収容や都市型難民の問題など、ISSJの事業と直接関係のあるテーマも大きく取り上げられ、また、アジアセッションはすでに馴染みの顔も多く、打ち解けた雰囲気でした。モデレータはISS香港支部が務め、最も印象的だったのは、8カ国の難民女性10人が一人ずつ自分の体験と過酷な現実について話すセッションでした。全員に共通する問題は、難民女性（少女を含む）の保護が不十分であるために貧困状態に置かれ、教育の機会が与えられず犯罪や性的暴力の被害に遭いやすいということでした。多くの人が断片的に知っている話ですが、一人一人が語るストーリーは実に胸が痛みました。2011年は難民条約発効60周年、無国籍条約発効50周年、日本の難民条約加入30周年にあたります。総括として、UNHCRとNGOのパートナーシップ強化が確認されました。（ソーシャルワーカー 石川美絵子）



香港の難民のメンタルヘルス研修報告

11月9～12日香港で開催されたAsia Pacific Refugee Rights Network (APRRN)主催の難民のメンタルヘルスに係る研修へ参加しました。香港を中心に、韓国、日本、インドなどから60名近い参加があり、それぞれの現場経験を共有することができる貴重な場でした。

香港では難民認定審査期間、また認定後も就労が認められず、基本的に第三国へ出国することになります。その間生活支援はISS香港が主に担っており、ソーシャルワーカーが一人一人のクライアントの社会的需要を見極めつつ、住居光熱費・日用品・食料・交通費など現物支給をしています。その資金は香港政府から、ISS香港に支給されています。効率よく体系だった支援システムに驚かされると同時に、最低限の生活を保障されても就労できず、本国や新しい国で、本来の自分の人生を奪われているという難民の感情は容易に統合されるものではないことを教えられました。

研修は実際に難民キャンプなどの現場で心理療法を行っている専門家によるもので、ロールプレイなども交えた実践的なものでした。それは『聴く』という方法が、難民が自らの生活を回復させるためにどれだけ大きな助力となり得るのか実感させられるものでした。難民が本国で受けたトラウマは、異文化の中で生活するなかで深まり、身体の不調として現れ、やがて生きることを妨げるようになります。聴く過程で『闇』が開かれ、ただ抱擁するような空間を作り共にいることでクライアントは自ら回復していくのだという言葉は経験に基づいた力強いものと感じました。（ソーシャルワーカー 重藤裕子）



グローバルフェスタ報告

10月1日、2日に日比谷公園で行われたグローバルフェスタに出展しました。これは、日本国内外で国際協力の分野で活動しているNGOや国際機関、政府機関や企業等が参加するイベントです。220団体が出展した今年は、東日本大震災を受けてより強化された日本と世界のつながり、「絆」をテーマに開催されました。入場者は過去最多の11万人でした。

ISSJでは、カンボジア事業の特製カレンダーを中心にカンボジア製品の販売を行いました。さらに、パネル展示を通して主にカンボジア事業と国際養子縁組に関する説明を行いました。国際NGOであり、社会福祉法人であるISSJの特徴が伝わったのではないかと思います。ブースに立ち寄って下さった方の中には、熱心に話を聞き、次の日にご友人を連れて再度来て下さった方がいました。また、グローバルフェスタでISSJのチラシを見たから、と映画会に来て下さった方もいました。来場者の方々からの真摯なご意見・ご質問に議論が白熱しました。私たちスタッフにとっては、世界との絆はもちろんのこと、国内の支援者、また他団体との絆を深める良い経験になりました。これからも積極的な広報活動を通じて、ISSJの事業を皆様にご紹介できたらと思います。





国際養子縁組援助のケース

最近のケースをご紹介します。児童養護施設で暮らす3歳児Aちゃんの国際養子縁組の依頼が児童相談所からISSJに対してありました。児童相談所は日本でAちゃんの養子縁組がまとまらず、このまま施設で成長するよりは養子として温かい家庭で養育されることが好ましいという判断でISSJへ希望をつなげました。ISSJではAちゃんの養親として最適と思われる養親候補者B夫妻を児童相談所に照会・了承を得て、晴れてAちゃんはB夫妻の養子となるべく、適応試験期間が始まりました。当初は言葉の壁や劇的な環境の変化からの戸惑いや養親の愛情を試す行動もありましたが、夫妻は忍耐強く焦ることなくAちゃんを養育し、適応試験期間が終わる頃にはパパとママの揺るぎない愛情に安心したAちゃんの情緒的にも安定した様子が顕著に現れていました。今後ISSJでは特別養子縁組を申し立てる予定です。(財団法人JKA補助事業)

国籍取得援助のケース

ISSJで援助している未成年者の就籍のケースはその多くがフィリピン国籍のものです。最近のケースとしては、児童相談所に措置されている未成年者の就籍の援助を依頼されるケースが多く、子ども達の母親とは連絡が取れない、または行方不明のケースがほとんどです。その場合は、母親に関する情報や書類(パスポートや外国人登録証等)があれば、本国に照会することができます。フィリピンの場合は、マニラにある国家統計局に母親に関する書類があるかを、社会福祉開発省(DSWD)を通して問い合わせますが、その返事が来るのに、半年近くかかっています。(財団法人日本財団助成事業)

難民申請者への援助

ISSJは国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)からの委託事業として主に入国管理センターへ収容されている難民申請者に対しカウンセリングを提供してきました。しかし収容施設の外でも生活苦や不安から心身ともにバランスを崩してしまう難民申請者も増えており、逐次ISSJの事務所で相談を受け状況に応じ医療へ繋ぐ支援をしています。疲弊し、希望を失い、命を絶つことも考える申請者は少なくありません。心理的支援の幅を広げるため、難民支援に係るワーカーが11月香港で開催された難民のメンタルヘルス研修へ参加してきました。また、12月9日、10日にそれぞれ大阪、名古屋で難民のメンタルヘルスに係るワークショップを開催しました。(UNHCR委託事業)



ISSJ オータム中国琵琶コンサート

2011年11月16日(水)18時半より、広尾ガーデンにあるフレンチ・レストラン「シェ・モルチェ」にてISSJオータム中国琵琶チャリティコンサートが開催されました。中国琵琶演奏者、王晓東(ワン・シャオトン)氏の中国琵琶と妻の吉元ミイ子氏のピアノとのコラボレーション演奏でした。曉東氏は北京出身。

中国の国立音楽大学である中国音楽学院で中国琵琶を極めた奏者で、現在は東京藝術大学音楽部で講師として東洋音楽演奏を指導しています。

当日、皆様にお食事をお取りいただいた後、岩井理事長からISSJに関する説明とご挨拶があり、王晓東氏の演奏が始まりました。「シルクロード」、「蘇州夜曲」、「花」など12曲が演奏され、参加者は皆“シルクロードの風”を感じさせるような中国琵琶の音色に聞き入っていました。予定していた2時間はあっという間に過ぎ、アンコールに応じて「アメージンググレース」なども演奏されました。ISSJのことを紹介する良い機会となりました。

このプログラムは当初9月21日を予定していましたが、当日電車が止まるほどの台風が東京を直撃したため急遽延期と致しました。「シェ・モルチェ」では前日から準備をされていたにもかかわらず、チャリティなのでとご理解くださり、全負担を「シェ・モルチェ」で担っていただきました。ありがとうございました。





第64回チャリティ映画会・バザー開催のご案内

明けましておめでとうございます。いつもISSJ映画会をご支援頂きありがとうございます。

第63回映画会は一つ橋ホールで10月19日に開催致しました。天才彫刻家イサム・ノグチの母親の波乱に満ちた生涯を描いた「レオニー」を上映し、3回合わせて1300人を超える来場者でとても好評でした。松井久子監督からのメッセージも映画会ちらしに頂戴いたしました。皆様からのご支援は参加券、募金、バザーへのご協力を合わせて3,015,879円で、国境を越えて支援を必要としている子ども達とその家族のために大切にに使わせて頂きます。

映画会の実施にあたっては、ちらし広告のご協力をいただいている株式会社ペリニオン、映画選考のアドバイスおよびフィルム手配をしてくださる東急レクリエーション、映画選考のアドバイス及びチケット販売のご協力を頂いている岩波ホール、バザーに協賛してくださるモンスイユをはじめ多くの企業・団体からもご支援、ご協力を頂いております。多くの皆様からのご支援を受けて、また幅広いボランティアネットワークに支えられて次回で第64回目を迎えます。「継続は力なり」で、今後も多くの皆様に“感動”と“楽しさ”をお届けできるような映画会・バザーを開催してまいりたいと思います。

次回第64回映画会は2012年6月15日(金)開催予定で、上映作品は「ジュリエットからの手紙」です。イタリア、ヴェローナにある「ジュリエットの生家」と呼ばれる家には、今でも世界中から毎年恋の悩みを相談した5000通もの手紙が届いていますが、その一通をきっかけに50年前の恋人を探す旅を描いた心温まる作品です。

皆様のISSJ映画会へのご参加が多くの子供達の援助に役立っております。ご来場を心よりお待ちしております。

日時 : 2012年6月15日(金) 11:00、14:45、18:30
場所 : 一つ橋ホール(日本教育会館3F、神保町駅徒歩3分)
上映作品 : ジュリエットからの手紙(2010年 米国 105分)

次回 上映作品



~ 50年分の愛を抱えて、
あなたに会いに来ました ~

配給 : ショウゲート
(c)2010 Summit Entertainment, LLC. All rights reserved.

